

その織物が近所の評判となり、このけちんぼ男はいつかくらしがよくなっていったが、さて一つ不審なことに米びつの米の減り工合いがどうもおかしいことに気づいたんだとお。それである日、仕事に行ったふりをして戸のすき間からのぞいたら、一匹の大蛇がどぐろをまいておにぎりをペロペロのんでいる凄じありさまをみてしまった。男は、さてはあの娘は蛇だったのか、蛇につけねらわれたと思うとゾツと寒気がして、このままでは狂い死により外はないと思案にあまったんだとお。そうして仕事などもう手がつかず、めしものを通らないほどで、鉢巻きしてドツと床についたんだとお。女房はまめまめしくしてくれたが一たんすさまじい正体を見てからは、二度と近寄れない。それを知った女房はカツとなって「正体をみられたか。くやしい。生かしておくものか。」と恐ろしい大蛇の形相となり、ひと呑みにしようと追いかけてきたんだとお。男はほうほうのていで寢床からぬけだし、どんどん走ってゆく。そうしてあわやひと呑みという途端に、道の傍らに生えていたよもぎとしようぶを夢中でつかんで蛇に投げつけたんだとお。蛇はぐったりしおれて姿を消してしまった。それが五月五日の節句の日だったので、屋根のひさしによもぎとしようぶをさして魔除けとしはじめたんだとお。